



甲斐市立竜王南小学校 自己評価書

令和8年2月2日（月）作成

校長 本田 司

記述者 職名 教頭 片山 義隆

学校教育目標 楽しい学校（楽校）の創造－やる気 こん気 げん気－

学校経営の基本方針

- ・「生きる力」を育む，教育課程の編成と実施
- ・「確かな力」を育む，子供主体の授業の創造
- ・思いやりの心や情操を培い，「豊かな心」を育む，居心地のよい学校・学級（集団）の創造
- ・たくましく生きるための「健康な体」を育む，健康・安全な生活と環境の創造
- ・「地域とともに歩む信頼される学校」の推進

1 全体評価

本校の教育活動全体を通して見ると，学校教育目標や学校経営方針に基づいた取組が概ね計画通りに進められ，教職員の自己評価，児童・保護者アンケートともに高い肯定的評価が得られている。特に，以下の項目において学校全体として一定の成果を上げていることがうかがえる。

- ・学校経営の方針の共有
- ・児童の実態に即した教育実践
- ・協働体制や報連相を重視した学校運営
- ・主体的な学びを意識した授業改善
- ・生徒指導や心の教育の充実，
- ・地域と連携した教育活動

また，児童の多くが学校生活や授業を「楽しい」と感じ，学習内容の理解や規範意識の形成，集団づくりに前向きに取り組んでいる様子がアンケート結果から読み取れる。

加えて，児童会活動や縦割り活動，教室環境づくり，朝活動，外遊びの推進など，本校の特色ある取組が児童の意欲や人間関係づくりにつながっていることがうかがえる。

一方で，校務支援システムの活用，ICTの家庭学習への活用，個に応じた学習支援，相談体制の実感，キャリア教育に対する児童・保護者の意識などについては，取組の理解や実践に差が見られ，今後の課題として明らかになっている。また，保護者や地域との連携，PTA活動への参加においても，一定の評価を得ている一方で，さらなる工夫が求められている。

2 項目ごとの評価結果（達成状況・改善策）

I 学校教育目標に関して・学校経営について

| | |
|------|--|
| 達成状況 | <p>○学校経営方針や教育目標に基づいた教育活動について，肯定的評価（A・B）が100%となっている。これは，年度当初や年度途中に，校長より学校教育目標や学校経営方針についての説明やそれに関連する話があったり，学年主任が中心になって，教育目標や重点目標を踏まえた学年経営を行ったりしているためと考えられる。</p> <p>○教育活動計画に基づいた，児童の実態に即した実践についても，高い自己評価が見られる。各学年の担任が，学年や個々の実態をしっかりと把握し，計画と実践の連動を図っていることが考えられる。</p> |
|------|--|

| | |
|---------------------|---|
| | <p>○P D C Aサイクルを生かした教育活動と児童の行動目標を意識した教育活動についても、肯定的評価（A・B）が100%か100%近くとなっている。日常の教育活動の中で、計画・実行・評価・改善のサイクルを繰り返すことが教育効果を上げることを、教職員が理解して、取り組んでいることがこの結果につながっていると思われる。</p> |
| 改善策 | <p>○学校長より、年度始めや学期始めの職員会議、終礼や校内研究会等で学校経営方針に基づいた確認を常に行い、教頭が補佐することで、P D C Aサイクルの効果的な活用や評価・改善の視点を教職員間で共有し、組織的に教育改善につなげていくことが重要となる。</p> <p>○「こんな姿で行動してほしい。」「こんな姿を目指してほしい。」といった行動目標を、活動前に教職員間で共有し、指導にあたることが求められる。</p> |
| II 学校運営について | |
| 達成状況 | <p>○危機管理マニュアルの理解や個人情報の管理において、高い自己評価を示している。年間7回行われている避難訓練の際のマニュアルの確認や、服務規律確保に関する自己チェックの取組などが効果を上げている要因の1つと考えられる。</p> <p>○協働体制や報連相、児童の健康管理においては、肯定的評価（A・B）が100%となっている。職員間の連携がしっかりと図られていると共に、報連相による情報共有などの学校全体での取組が一定程度浸透していることが高評価の要因と考えられる。また、養護教諭や保健委員会が中心となって進める健康管理を呼びかける放送や健康観察などが効果を上げていると思われる。児童自身も事故やケガがないように過ごすことを心がけていることが児童アンケートからも読み取れる（児童用アンケート設問28）。</p> <p>○研修に主体的に関わっている職員が多いことがアンケート結果からもうかがえる。全職員が共通のテーマに向けて授業改善を図る校内研究会や、中巨摩全体で行われている研修会が教職員としての個々の資質を高める機会となっていると考えられる。</p> <p>○校務システムの十分な活用や業務効率化の意識において、A評価の値が低くなっている。情報の共有や業務の効率化のために多くの職員が日常的に使用している校務支援システムだが、一部の職員では活用や実践に差があることが示唆されている。</p> |
| 改善策 | <p>○危機管理マニュアルの理解をより進めるために、職員を対象とした研修の機会を設け、火災や地震、不審者などの学校が直面することが想定される危機に対して、適切に対処できるようにする。</p> <p>○信頼される学校を目指して、過去の事例を踏まえた研修等を実施したり、管理職が日常的に指導や助言を行ったり、今後も職員の規範意識を高める取組を行っていく。</p> <p>○職務上の連絡等については、今後も校務支援システムの活用を周知徹底して行っていく。</p> <p>○教職員に求められる業務量が多いため、今後も業務の効率化を図っていかねばならない。そのために学校DXの視点に立って事務的な内容をデジタル化していくことが必要で、教職員の働き方への変革を継続していく必要がある。</p> |
| III 学習指導について | |
| 達成状況 | <p>○教職員は、児童生徒の学びの意欲を喚起する授業、個に応じた基礎・基本の定着、授業と評価の一体化、協働的な学びの導入において、肯定的評価（A・B）が100%、あるいは100%近くとなっている。『自ら考え、学ぶ子供の育成（子供が主体的に学ぶ授業づくり）』と</p> |

| | |
|--------------------|--|
| <p>況</p> | <p>いう今年度の校内研究会のテーマを、教職員が意識して、日頃の授業実践にあたっていることが、この高評価の要因の1つと考えられる。児童用アンケートの設問4～7では、授業を楽しんでいると感じていたり、学習内容が理解できたりしていると回答している児童の割合がそれぞれ9割を超えている。また、教職員が熱心に授業に取り組んでいると評価している保護者の割合は9割を大きく超えている（保護者用アンケート設問8）。このことから、教職員の授業づくりの姿勢や工夫が、児童の学習意欲や学習理解度につながっていることがうかがえる。ただ、授業内容の理解に関して、不安を感じている保護者が1割近くいることから、個に応じた指導が求められていると考えられる（保護者用アンケート設問9）。</p> <p>○ICT活用に関する設問では、肯定的な評価が多いものの、宿題に関しては十分活用できていないと感じる職員が4割近くいる。昨年度甲斐市のICT教育推進事業の研究指定を受けていた関係で、授業への活用が大きく進んだものの、宿題に関しては、タブレット端末の重量や児童の発達段階から学年間で使用に差が出てきている。</p> <p>○宿題や家庭学習への指導に対して、ほぼ100%の職員が肯定的な評価をしている。児童と保護者は、9割以上が宿題に関しては取り組んでいると回答しているが、自主学習への取組が十分にできていない状況がアンケート結果からうかがえる。ただ、8割以上の児童は学年の目標時間は勉強しているため、自主学習をする時間を別に確保できていないと思われる（児童用アンケート設問16・17 保護者用アンケート設問12・13）。</p> |
| <p>改善策</p> | <p>○教職員一人ひとりが、児童の学びを喚起し、基礎基本の定着を図る授業実践をしていくために、校内研究会や各種研修に積極的に参加し、授業力の向上を目指すことが求められる。今年度、自主研修として校内で行われたプチ研修は、職員間で好評であったため、来年度も実施をしていく方向である。</p> <p>○今年度の校内研究会の振り返りが現在行われているが、次年度以降も、児童の学びに対する実態を的確に捉えた研究テーマを設定し、計画・実践・振り返りを繰り返すことで、学びの質の向上を図る取組をしていく。</p> <p>○ICT端末の宿題における利用に関しては、紙の宿題と併用しながらより効果的な活用を引き続き考えていく。休業中にすでに行っているドリル学習や復習課題で基礎の定着を図ったり、自主学習での使用も模索したりするなど、学年による児童の実態に合わせた活用方法を校内研究会の中でも探っていく。</p> <p>○児童の自主学習への意欲を高める工夫として、学習内容を選べる仕組みづくりや、学習方法の習得、成果の承認、家庭との連携などが考えられる。このような取組を学校全体として段階的に指導していける仕組みを、研究主任を中心に構築していく。</p> |
| <p>IV 生徒指導について</p> | |
| <p>達成状況</p> | <p>○教職員は、学級・学年・学校集団づくりや規範意識の育成において、肯定的評価（A・B）が100%となっており、校長が掲げる学校経営の具体的取組を実行している。児童のおよそ96%が学校を楽しんでいると感じていたり、学校のきまりや約束事を守ったりしていると回答している。また、保護者は集団づくりや児童の規範意識を高めるための教職員の指導に対して、9割近くが肯定的な思いを抱いており、あらゆる教育活動での学校側の取組が評価されていることがアンケート結果からうかがえる。（児童用アンケート設問1・13 保護者用アンケート設問1・7）</p> |

| | |
|--------------|---|
| | <p>○児童のあいさつの実施に関しては、地域でのあいさつにおいて、肯定的評価（A・B）が約89%に対して、学校でのあいさつは肯定的評価が94%となっている（児童用アンケート設問23・27）。また、保護者が感じているあいさつの指導に関しては、家庭での指導は肯定的評価（A・B）が約92%であるのに対して、学校での指導に対しては肯定的評価が約80%にとどまっている。</p> <p>○いじめや不登校の未然防止に向けて、学校生活の様々な場面で児童へ指導していることが、肯定的評価（A・B）が100%に近いという結果に表れている。日頃の授業の中で、意見を交わし合う場面を設定したり、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れたりしながら、児童相互を結びつけ、児童相互が理解し合う取組を継続している。</p> <p>○児童とのコミュニケーションにおいても肯定的評価（A・B）が100%となっている。会話や遊びを通して、児童理解を図ったり、信頼関係を築いたりしている教職員の意識がこの結果からうかがえる。しかし、児童と保護者ともに、15%近くが「相談できる教師がいない・あまりいない」と回答している（児童用アンケート設問12・保護者用アンケート設問10）。</p> <p>○キャリア教育の実施においては、肯定的評価（A・B）が100%に近いが、中には自らの実践が十分ではないと感じている教職員もいる。「将来の夢や希望を抱いている」と答えた児童は8割を少し超え、保護者は7割をわずかに超えている（児童用アンケート設問25・保護者用アンケート設問22）。</p> |
| 改善策 | <p>○生徒指導提要が改訂され、生徒指導の定義が、「児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることが出来る存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動」となった。「させる指導」から「支える指導」となったことを教職員が再度認識する中で、家庭と連携して、あいさつを含めた規範意識を高める指導を学校生活のあらゆる場面で行う。また、その指導の様子を、お便り等を通して保護者や地域に発信していく。</p> <p>○2学期末のいじめの認知件数は14件、15日以上欠席している児童数は25名であった。この現状を改善するために、道徳を中心として人権意識の涵養や心の教育の推進を、今後も継続して行うと共に、家庭と連携した不登校の未然防止や初期対応、継続支援を充実させていく。</p> <p>○日常的な関わりに加え、「相談してよい」「安心して話せる」関係性づくりを意識した声かけや、担任以外の教職員を含めた相談体制の可視化を進め、児童・保護者が相談しやすい学校づくりを一層推進していく。</p> <p>○行事や特別活動にとどまらず、日常の授業や学級活動と関連付けたキャリア教育を充実させるとともに、児童一人ひとりの成長や自己理解を大切にしたい支援を進め、将来への前向きな意識を育てていく。</p> |
| V 地域との連携について | |
| 達成状況 | <p>○地域人材や施設の活用に対して、肯定的評価（A・B）が100%近くとなっている。胞子の会による農作物栽培の指導をはじめ、本校では今年度も様々な学年で地域人材を活用した授業が多く行われてきた。その充実度が高い数値となって表れていると考えられる。</p> <p>○保護者や地域との情報交換についての設問では、教職員と保護者（保護者用アンケート設問5）とも肯定的な評価が多いが、学校側の取組が十分でないとする保護者も若干いる。</p> <p>○お便りやホームページによる学校活動の広報に関しては、肯定的評価（A・B）が100%</p> |

| | |
|---------------------|---|
| | <p>となっている。毎月1回発行する学年便りに加え、クラスによっては学級便りを発行することで、児童の活動の様子や頑張りを発信することに取り組んだことが、この高い数値の要因と考えられる。保護者側も学校の広報活動に対して肯定的な評価が多いことから、お便りやホームページが児童の様子を伝える手段として有効と判断できる。（保護者用アンケートの設問4）</p> <p>○P T A 活動への参加状況に関する設問（保護者用アンケートの設問11）では、保護者の7割以上が肯定的評価（A・B）をしている。一方で十分に活動への参加が出来ていない保護者が3割近くいることから、保護者間でP T A 活動に対する意識の差があることがうかがえる。</p> <p>○地域とともに歩む信頼される学校づくりを目指す本校の取組の1つである学校開放や、保護者・地域との連携が、保護者から高い評価を受けていることが設問6と23の回答結果から分かる（保護者用アンケート）。また、地域・保護者と連携した安全確保においては、教職員自己評価の肯定的評価（A・B）が100%となっている。この結果から、保護者や交通安全指導員、地域の見守り隊の安全指導に対して、教職員が感謝の思いを抱いていることが感じられる。</p> |
| 改善策 | <p>○学校開放日の設定やお便りやホームページを活用しての情報発信など、学校の取組を地域や保護者に知ってもらう取組の継続が信頼される学校づくりに求められる。よって、今後も校務のDX化で情報発信の方法は変化していくことが予想されるが、学校からの情報発信を続けていく。</p> <p>○P T A 活動への保護者の参加意識は、昨年度まで肯定的評価（A・B）が6割台であったが、今年度は7割を大きく超えている。今後も、保護者が負担感を感じることなく、前向きに参加できるP T A 活動を目指していく必要がある。それと共に、「チームりゅうなん」の活動をより活発にして、保護者や地域の方々が教育活動に参加する機会を増やすことも重要となる。</p> |
| VI 学校の特色に関して | |
| 達成状況 | <p>○児童会行事への参加促進に関しては、肯定的評価（A・B）が100%となっている。これは、全教職員が児童会活動の異年齢集団との関わりという意義を共有し、価値ある活動として位置づけて活動している結果と考える。</p> <p>○教室環境づくりにおいても、肯定的評価（A・B）が100%近くとなっている。学習や活動の振り返り、係・会社活動の紹介などを掲示することで、学習や生活に対する意欲を高めたり、楽しさを見いださせたりする担任の工夫などが高評価の要因と考えられる。</p> <p>○児童の発表機会の保障や朝活動においても、肯定的な評価がほぼ100%である。自らの考えを伝える重要性や読書と算数に取り組む朝活動の意義を全教職員が理解していることが、この結果からうかがえる。ただ、人前で自分の意見を伝えることに抵抗を感じている児童が27%おり、授業での発表者に偏りが生じている実態が数値からも分かる（児童用アンケート設問10）。</p> |
| 改善策 | <p>○学校生活をよりよくするために主体的に考え、行動する力を育むことを目的とする児童会活動を今後も継続するために、年間計画の中に児童会活動をしっかりと位置づけると共に、児童会本部役員がゆとりを持って活動する時間を学校生活の中に保障していくことが必要である。</p> |

| | |
|-----------------------------|---|
| | <p>○児童の学習意欲や安心感を高めるためにも教室環境の整備は重要である。お互いを尊重し合い、安心して自らの意見を伝えたり、落ち着いて朝活動に取り組んだりするためにも、教室環境を整える工夫を今後も継続していく。</p> <p>○自らの意見を人前で伝えることができる児童を育成するためには、「正しさ」よりも「考え」を大切に評価や、安心して話せる環境をつくることも必要となる。</p> |
| <p>VII 創甲斐教育について</p> | |
| <p>達成状況</p> | <p>○基本的言語事項の習得や自己の振り返り・表現の促進において、肯定的評価（A・B）が100%に近い値となっている。これは、学習の振り返り（学習感想）を児童が記述する指導や各学級で日記等を書かせたり、オノマトペを使って詩や短歌をつくる指導を行ったりと、書くことを通しての言語活動を活発に行っていることが要因だと考える。</p> <p>○国語の授業内容の理解度を問う設問6（児童用アンケート）では、肯定的評価（A・B）が9割を超えている。一方で、字を丁寧に書く児童の割合が若干低くなっていることが児童用アンケートの設問11の回答から分かる。</p> <p>○家庭での読書量に関する設問で、「全くしない」と回答する児童の割合は、児童用アンケート設問18では24%、保護者用アンケート設問14では41%となっている。学校では、朝活動として週に3回読書を行っているが、家庭で読書に取り組む児童が少ないことがこの数値から分かる。また、子どもとの読書時間の確保と地域の図書館利用に関する保護者用アンケート設問26では、7割を超える家庭が、親子での読書や図書館の利用がないと回答している。</p> <p>○外遊びや縦割り班活動の推進においても、肯定的な評価が多くなっている。児童会主催のわくわくタイムで、異年齢の児童同士が共に遊ぶ機会が年間を通して行われていたり、中休みや昼休みに児童と一緒に遊ぶ教職員が何人もいたり、遊びの中で児童と児童、児童と教師が結びつき、相互の信頼関係を深めていることが高評価につながっていると考えられる。</p> |
| <p>改善策</p> | <p>○基本的な言語事項の習得を目指すために、日常的な言語環境を整えることや読む・聞く活動を通して定着を図ること、話す・書く場面での基本的な言語の活用を促すことなどの繰り返しと段階的な指導を今後も継続して取り組んでいく。</p> <p>○字の丁寧さの基準を具体的に伝えたり、評価の視点を「速さ」よりも「丁寧さ」に置いたりするなど、児童が「なぜ字を丁寧に書くのか」を納得する指導を様々な教科を通して行っている。</p> <p>○学校で読んでいる本を家庭に持ち帰るなど、学校で行っている朝読書の取組を家庭へつなげる工夫を行うとともに、短時間でも無理なく取り組める読書の在り方を保護者に発信し、家庭と連携した読書習慣の定着を図っていく。それと共に、地域の図書館利用の促進を家庭に呼びかけていく。</p> <p>○児童会本部や児童会主任が中心となり、異年齢が触れあうことができる活動を来年度以降も継続していく。また、外遊びなどの活動も児童の実態把握や信頼関係の構築の時間ととらえ、今後も教職員が児童と共に遊ぶ機会を持てるように職場環境を整えるなどの取組を学校全体で継続していく。</p> |

3 まとめ

<成 果>

- 学校教育目標や学校経営方針に基づいた教育活動について、教職員・児童・保護者のいずれからも高い肯定的評価が得られており、学校全体として共通理解のもとに教育活動が推進されていることがうかがえる。校長講話や学年主任を中心とした学年経営を通して、目標を意識した実践が定着してきている。
- 児童の実態を的確に把握し、教育活動計画に基づいた指導が各学年で行われていることから、主体的・対話的で深い学びを意識した授業づくりが進んでいる。児童の多くが授業を楽しんでいると感じており、学習内容の理解が進んでいる。
- 危機管理や個人情報の管理、協働体制や報連相、児童の健康管理など、学校運営の基盤となる取組において高い評価が得られており、組織として安定した運営が図られている。
- 生徒指導や心の教育に関する取組、児童会活動や縦割り活動、外遊びの推進などを通して、児童同士や教職員との信頼関係づくりが進み、規範意識や集団づくりの面でも成果が見られる。
- 地域人材の活用や学校だより、ホームページ等による情報発信など、地域とともに歩む信頼される学校づくりが進み、保護者や地域から一定の評価を得ている。

<課 題>

- 校務支援システムの活用や業務効率化に関しては、職員間で取組に差が見られるため、効果的な活用方法の共有や業務改善に向けた共通理解が求められる。
- 学習指導においては、授業理解に不安を感じている児童・保護者が一定数いることから、個に応じた指導や支援の充実が課題である。また、ICTの宿題や家庭学習への活用についても、学年間での差を踏まえた検討が必要である。
- 児童との日常的なコミュニケーションは十分に図られている一方で、「相談できる教師がいない・あまりいない」と感じている児童・保護者が一定数いることから、相談体制の見える化や、安心して相談できる関係づくりが求められる。
- キャリア教育については、取組自体は進められているものの、将来への意識や実感において課題が残っており、日常の教育活動と関連付けた指導の充実が必要である。
- 保護者や地域との連携、PTA活動への参加については概ね良好であるが、参加状況や意識に差が見られるため、より多くの保護者が関わりやすい工夫が求められる。
- 学校での朝読書の取組を家庭にもつなげ、学校で読んでいる本を持ち帰るなどの工夫を行う。あわせて、短時間でも気軽に取り組める読書の方法を保護者に伝え、家庭と協力して読書習慣の定着を図るとともに、地域の図書館の活用を呼びかけていく。